大人にはわからない日本文学史

高橋源一郎

教材のねらい

1　選定の理由

ここまでに、古文、漢文、近現代文、そして詩歌の学習を積み重ねてきた。本教材では、最後に学習の道のりを振り返り、現在において過去の作品を読むことの意義について改めて考えたい。

筆者は、文学史について独自な考え方をしている。過去の作品を、現在の自分から遠く離れたものとしてではなく、同時代に起きつつある、自分にとってインパクトのある出来事と同様に見ているのである。すでに定まった作品についての評価を知り、それらを時期に従い、流れとして理解するような文学史の学習が、日本の来歴を知る重要な学習の一角であるのは言うまでもない。だが、それぞれの作品を自身で読み、評価を考え直す過程こそ、論理的な理解、創造的な読解、他の作品や時代状況もふまえた批評などが要求される、主体的かつ総合的な学習である。これは、伝統を現代に生かすことにもなる。

本教材は、そうした考え方を自分で発見した際の楽しさを、かつての体験に即したわかりやすい語り口で説明するものである。論理的に読み込める教材であるが、同程度に、この楽しさに寄り添いたい。

2　指導のねらい

本教材では、筆者が若き日に、ビートルズをきっかけとして、文学史について、一般的な理解とは異なる考えに至った感動が、生き生きと描かれている。ただし、現代の生徒にとっては、ビートルズがすでに歴史に属すると考えられるので、論の展開を辿り、筆者の感動の質を論理的に理解する、または自分の体験などを思い合わせて体感的に理解するなど、複数のアプローチにより、筆者が感じている面白さを理解したい。そのうえで、「言語文化」の学習全体を振り返り、自分なりに意義付けたい。

(1) 文章に即して、筆者の「過去」や「歴史」に関する考え方の独自性を整理する。

(2) 教材に書かれている筆者の体験が、どのような点で本人にとって重要であったのかを理解する。各自の体験の中で、類似の体験があるかを考えてみるのもよい。

(3) 筆者の考え方について、古典や漢文、近現代の作品を読む上で、どのような点が有意義か考える。

(4) 本教科書のこれまでの学習を総合し、古典から現代までの作品を見渡して、自分なりの文学史を作る。それを通して、「言語と文化」全体の達成を振り返る。

3　評価規準

(1) 言葉には、文化の継承、発展、創造を支える働きがあることを理解している。〔知・技〕(1) ア

(2) 常用漢字の読みに慣れ、主な常用漢字を書き、文や文章の中で使用している。〔知・技〕(1) イ

(3) 我が国の言語文化に特徴的な語句の量を増し、それらの文化的背景について理解を深め、語感を磨き語彙を豊かにしている。〔知・技〕(1) ウ

(4) 文章の意味は、文脈の中で形成されることを理解している。〔知・技〕(1) エ

(5) 我が国の言語文化の特質や我が国の文化と外国の文化との関係について理解している。〔知・技〕(2) ア

(6) 時間の経過や地域の文化的特徴などによる言葉の変化について理解を深め、古典の言葉と現代の言葉とのつながりについて理解している。〔知・技〕(2) エ

(7) 我が国の言語文化への理解につながる読書の意義と効用について理解を深めている。〔知・技〕(2) カ

(8) 「読むこと」において、文章の種類を踏まえて、内容や構成、展開などについて叙述を基に的確に捉えている。〔思・判・表〕B (1) ア

(9) 「読むこと」において、作品や文章に表れているものの見方、感じ方、考え方を捉え、内容を解釈している。〔思・判・表〕B (1) イ

(10) 「読むこと」において、文章の構成や展開、表現の仕方、表現の特色について評価している。〔思・判・表〕B (1) ウ

(11) 「読むこと」において、作品や文章の成立した背景や他の作品などとの関係を踏まえ、内容の解釈を深めている。〔思・判・表〕B (1) エ

(12) 「読むこと」において、作品の内容や解釈を踏まえ、自分のものの見方、感じ方、考え方を深め、我が国の言語文化について自分の考えをもっている。〔思・判・表〕B (1) オ

(13) 進んで筆者の「歴史」や「文学史」に対する考え方を整理し、「自分の文学史」を作ることを通して、今までの学習を生かして、我が国の言語文化についての理解を深め、ものの見方、感じ方、考え方を深めようとしている。〔主体的に学習に取り組む態度〕

指導計画案

展開	導入	展開	
指導上の重点目標	1 題名の「文学史」を意識しながら通読させる。	1 「過去」や「歴史」に関する筆者の考え方とその推移について整理させる。	2 筆者が実体験を通じて抱いた「過去」や「歴史」に関する考え方を、生徒自身の体験と照らし合わせながら、類似の体験がないか考えさせる。
学習活動	① 題名と内容のつながりを確認しながら読み通す。知技・思判表 ② 話の展開をつかみ、意味段落ごとに本文の読解をする。思判表	① 〈第一段〉(初め～三〇一・2) 「わたし」のビートルズ体験について整理し、「生まれて初めて『歴史』に触れた」と「わたし」が感じた原因について理解する。思判表	① 〈第二段〉(三〇一・3～三〇四・1) 「学校で受けた歴史教育」を通じて形成された「わたし」の「歴史」観について整理し、理解する。思判表 ① 〈第三段〉(三〇四・2～三〇五・9) 「わたし」が従来の「文学史」に感じた違和感について整理し、理解する。思判表
指導上の留意点	① 生徒に本文を黙読させながら、題名の「文学史」に関する筆者の考え方の独自性について、一般的な「文学史」のとらえ方とどのように異なるかをイメージさせる。同時に、なぜ「大人にはわからない」のかを考えさせる。 「構成」を参考にして整理する。第三段落で『過去』の小説」を「よく知っている友達のような気がした」と筆者が認識したプロセスについて、前後の段落の内容と結び付けながら理解させる。 ② 生徒自身の「歴史」に触れた経験を思い浮かべさせながら、なぜ「わたし」が「生まれて初めて『歴史』というものに触れた」と感じたのかを理解させる。 (1)ビートルズの名曲を聴き、「こんな偉大な人たちと同じ時代に生きていてよかった！」と感じている。 (2)「学校で受けた歴史教育」における「歴史」と、ビートルズの新曲を通じて実感した「歴史」とのずれに注目させ、その相違点について考えさせる。	① 「学校の歴史教育」の特徴について、本文中の複数の例示をもとに理解させる。 (1)「過去」＝偉大なもの(父親・母親・祖父・祖母・赤ちゃん)、「現在」＝つまらないもの(自分) (2)「歴史」＝時間の不可逆性(「過去」は戻ってこない、触れられない) 現在自分が受けている「歴史教育」について生徒に考えさせ、どのような特徴があるのかを筆者の見解と比較しながら話し合わせる。 ① 第一段、第二段の内容を受けて、ここで筆者が「文学史」をどのように見て、自分の「文学史」を書くことができるという考えにいたったかを理解させる。 (1)一般的な「文学史」における「過去」の小説とその評価について、教科書や資料集を用いて生徒にイメージさせる。 (2)『過去』なんてないんじゃないかな」、「あまり変わってないんじゃないかな」という筆者の言葉から、従来的な「歴史」認識との相違を整理させる。	

時限	展開	まとめと発展
指導上の重点目標		1 これまでの学習内容を踏まえて、古典から現代までの作品に関する「自分の『文学史』」を作らせる。
学習活動	① 〈第四段〉（三〇五・10～終わり） 「歴史」とは何かという問題について考える。思判表	① 評論全体を読み直し、筆者の「歴史」観、「文学史」観をまとめる。思判表 ② これまでの学習を総合し、古典から現代までの作品を見渡して自分なりの文学史を作る。主態・知技
指導上の留意点	① 『歴史』というものは、鑑賞するために壁に掛けられた絵ではありません。」という一文を踏まえながら、生徒自身の「歴史」のとらえ方を見つめ直させる。その際、次の考え方を順に確認させる。 （1）「歴史」とは「過去」の〈事実〉の集積ではないということ。 （2）「歴史」とは、それを作る「現在」を基点に作り出される枠組みという一面を有していること。 （3）「現在」には個々の生徒自身も含まれ、「歴史」の形成に参加しているということ。	① 筆者の考え方を踏まえることで、古典や漢文、近現代の文学作品を読んだ際に、どのような変化が生じるかを考えさせる。 ② それぞれの作品を自分で読み、評価を考え直す過程には論理的な思考力や創造的な読解力、各時代を見渡した批評性が求められる。したがって、「自分の『文学史』を作る」作業こそ主体的かつ総合的な学習となり得ることを理解させたい。

作者

高橋源一郎

昭和二十六（一九五一）年一月一日～。小説家。広島県尾道市に生まれる。小説家。明治学院大学名誉教授。麻布中学校に進学するも父親の失踪にともない灘中学校に転入。灘高校を経て横浜国立大学経済学部へ入学（後に除籍）。しかし、当時は大学紛争中のストライキのため授業はほとんどおこなわれず、高橋自身も活動家として街頭デモに参加し、昭和四十四（一九六九）年に逮捕。翌年八月まで拘置されることになる。その後約十年間、土木工事のアルバイトなど肉体労働に従事する。昭和五十六（一九八一）年の「さようなら、ギャングたち」で作家として注目を集め、これ以降小説や評論の枠にとらわれない多彩な文学活動を展開している。日本の近代文学を現代の大衆文化と融合させるなど、パロディを駆使した前衛的な作風は独特。平成十七（二〇〇五）年に明治学院大学国際学部教授に着任（平成三十一年定年退職）。競馬評論家、ラジオのパーソナリティなど多くの顔を持つ。

文学活動

昭和四十四（一九六九）年十一月に学生運動にかかわった高橋は凶器準備集合罪等で逮捕され、翌八月まで東京拘置所に収監された。収監中に一種の失語症となった高橋は、その後の約十年の体験をもとに「さようなら、ギャングたち」を執筆し、昭和五十六（一九八一）年に群像新人長編小説賞優秀作を受賞。当時同作はそのとらえどころのなさのために評価が大きく分かれた。文芸評論家の吉本隆明は「現在までのところポップ文学の最高の作品」という言葉を送った。昭和五十九（一九八四）年「虹の彼方に（オーヴァー・ザ・レインボウ）」（中央公論社）、六十（一九八五）年「ジョン・レノン対火星人」（角川書店）を刊行。これらは「さようなら、ギャングたち」とあわせて初期三部作と呼ばれる。平成元（一九八九）年「文学がこんなにわかっていいかしら」（福武書店）、十三（二〇〇一）年「日本文学盛衰史」（講談社）、十四（二〇〇二）年「官能小説家」（朝日新聞社）、十七（二〇〇五）年「ミヤザワケンジ・グレーテストヒッツ」（集英社）、一九年「ニッポンの小説―百年の孤独」（文芸春秋）、二十一（二〇〇九）年「大人にはわからない日本文学史」（岩波書店）など、日本の近代文学を半ば固定化された従来的な評価から引き離し、現在と接続して自由な発想でとらえなおした小説・評論・文学史を数多く発表している。令和二（二〇二〇）年よりＮＨＫラジオ第一放送で「高橋源一郎の飛ぶ教室」のパーソナリティをつとめている。

作者を解くカギ

言葉とは何か？　自明のようでけっしてそうではないこの命題を、高橋源一郎の小説は追及し続けている。その根源は、彼が八か月の拘置生活のなかで一種の失語症となった経験が大きいのではないだろうか。この体験を加藤典洋はこう説明している。

> とにかく、言葉が話せなくなり、書けなくなり、そうなって、それまで自分に空気のようだった言葉が、何だったのか、彼に、はじめてわかる、ということが起こる。もちろん言葉は自分と世界をつないでいる。これが使えなくなったら、ピンチだ。それはちょうど、自分と池の間の氷が、溶けてしまうようなこと

で、そうなったら、どうなる？――誰も、スケートを滑れなくなってしまうのである。（「解説　それって、どういう意味なんだい？――この小説の言葉、それからこの小説がそれでもやはり小説であること」「さようなら、ギャングたち」講談社文芸文庫　平成九）

こうした問題意識は、たとえば「さようなら、ギャングたち」にも顕著に表れている。その冒頭を見てみよう。

昔々、人びとはみんな名前をもっていた。そしてその名前は親によってつけられたものだと言われている。

そう本に書いてあった。

大昔は本当にそうだったのかも知れない。

そしてその名前は、ピョートル・ヴェルヘーボンスキイとかオリバー・トゥイストとか忍海爵（おしぬみじやつく）とかいった有名な小説の主人公と同じような名前だった。

ずい分面白かっただろうな。

物語世界において、事物に名前が付いているという事態が「本に書いて」ある「大昔」のあり方だという。言い換えれば、「わたし」はそうではない世界に生きているわけで、こうした感覚こそ高橋の失語症にともなう実感に由来するものにほかならない。「空気のようだった言葉」が遠ざかり、運用に支障をきたす感覚。現実世界とのかい離を突き付けられるような感覚に苛まれた高橋は、自分の言葉を模索し、その隙間を必死で埋めようとする。

以上のような〈当たり前〉を問い直すという思考・発想は、「歴史」や「文学史」という〈当たり前〉を問い直す本教材にも底流していると言えるだろう。

出典

本文は「大人にはわからない日本文学史」（岩波書店　平成二十一）によった。

出典との異同

教科書表記の統一による変更のほか、〔　〕内の理由により、以下の部分を省略した。

○「この本の中で、」（原文Ｐ六・14、教科書Ｐ三〇五・10「わたしは、」の後）〔教育上の配慮〕

○「もちろん、…遊んでいってください。」（原文Ｐ７・７～Ｐ７・９、教科書Ｐ三〇六・２の後）〔教育上の配慮〕

参考文献

＊教師用

「思考としての歴史と行動としての歴史」（白ソフィア双書23）
Ｂ・クローチェ、上村忠男訳　未来社　平十

＊「歴史」に関する思考の枠組みを大きく転換した著作。原著が第二次大戦下の一九三八年に刊行された点も重要である。

「始まりの現象」（叢書・ウニベルシタス358）

エドワード・W・サイード、山形和美・小林昌夫訳
法政大学出版局　平四

＊本教材の出典「大人にはわからない日本文学史」の「七日目」で高橋源一郎はサイードを引用しながら日本の近代文学の「始まり」と「現在」の小説について論じている。

「大人にはわからない日本文学史」　高橋源一郎
岩波書店　平二十一

＊本教材の出典。本教材は「はじめに」にあたるが、「一日目」から「七日目」まで、「過去」の文学を「現在」と重ね合わせる形で「自分の『文学史』」を作っている。

「立ちすくむ歴史―E・H・カー『歴史とは何か』から50年」
喜安朗・成田龍一・岩崎稔　せりか書房　平二十四

＊カーの「歴史とは何か」を入り口に、「現在」の歴史をめぐる諸問題を論じたもの。

＊生徒用

「文字禍」　中島敦　（「文字禍・牛人」〈角川文庫　令二〉収録）

＊「文字禍」は「山月記」とあわせて「古譚」というタイトルで戦時下の昭和十七年、「文学界」に発表された小説。「歴史とは何か？」という問題が、同時期の権力の問題を巧みに射抜きながら言い表されている。

「歴史とは何か」　Ⅰ歴史家と事実
E・H・カー、清水幾多郎訳　岩波書店　昭三十七

＊戦後一九六一年にカーがケンブリッジ大学で行った連続講演を書籍化したもので、「歴史」という枠組みを考えるうえで必読の書。

「日本文学盛衰史」　高橋源一郎　講談社文庫　平十六

＊二葉亭・漱石・鷗外・啄木・花袋…、何を、どう書けばよいのか苦悩する日本近代文学黎明期の文学者たちが総登場する長編小説。

「日本近代小説史」　新装版　安藤宏　中央公論新社　令二

＊明治初頭から村上春樹まで、日本の近代小説を一冊で案内した入門的「文学史」。

主題

「文学史」とは「過去」の文学の「評判」の集積ではなく、現在の自分たちを基点に自在に作り上げることのできる枠組みである。

「文学史」という言葉には、過去の作家とその名作とを羅列した、固定的で無味乾燥な「文学」の「歴史」というイメージがともないやすい。しかし、「文学史」を時間の間隔と関係なしに共通のテーマを抱えた文学活動としてとらえることができるのではないかと筆者は考える。「文学史」を絶対視するのではなく、「過去」の小説と「現在」の小説とを直結・応答させることで、「文学史」自体があくまでも「現在」を基点とする流動的な枠組みであるという一面が浮かび上がってくる。

構成

構成1

段落	ページ・行	段意
第一段	初め～P三〇一・2〈「歴史」というものに触れた瞬間でした。〉	ビートルズの新曲がラジオで放送された日、「わたし」は「歴史的瞬間」に自分が立ち会ったことに大きな感動を覚えた。それは「わたし」が生まれて初めて「歴史」に触れた経験だった。
第二段	P三〇一・3〈今思えば、わたしは、すごく単純な少年でした。〉～P三〇四・1〈しかし、本当に、そうなのでしょうか？〉	それまでの「わたし」は、偉大なもの、立派なもの、おもしろいものはすべて「過去」にあり、「現在」は魅力に乏しいと考えていた。また、時間が「不可逆的」である以上、「過去」は遠くけっして手の届かないものとも考えていた。こうした単純な「歴史」観は、学校での歴史教育の影響で作られたものだった。
第三段	P三〇四・2〈わたしはもう半世紀以上も、たくさんの本を、〉～P三〇五・9〈そのときが最初だったかもしれません。〉	実際にたくさんの小説を読んでいくなかで、「過去」の小説と「現在の小説の類比性・共通性に気づいた「わたし」は、「文学史」という「文学」に関する「歴史」に違和感を覚えるようになった。そして「わたし」は「評判」に縛られない「文学史」を書こうと思いはじめた。
第四段	P三〇五・10〈わたしは、「過去」の小説を、〉～終わり	「歴史」や「文学史」という枠組みに縛られた小説の評価から自覚的に距離をとり、あらためてそれぞれの小説を実際に読むことをとおして、自分自身を基点にした「文学史」を作り出すことができる。

構成2

第一段　「歴史」に触れた経験（一九六八年の「わたし」）
　　↓ビートルズ＝「偉大な人たち」

第二段　「わたし」の「歴史」観（「少年」の「わたし」）
　学校での歴史教育の影響
　「過去」…偉大なもの・立派なもの・おもしろいもの
　「現在」…つまらないもの
　「時間」＝不可逆的なもの
　　↓「過去」＝不変のものという認識

第三段　「文学史」への違和感（「半世紀以上」経た「わたし」）
　①文学史上の認識
　　↓遠い「過去」の出来事、遠い「過去」の作家が書いた作品
　②実際に「過去」の小説を読む体験
　　↓「過去」の小説と「現在」の小説の間の類似性・共通性の発見

第四段　「文学史」的思考からの離脱
　「歴史」≒「鑑賞するために壁に掛けられた絵」
　「歴史」＝「自分」（「現在」）と「過去」の応答のなかで形成し得るもの

板書例

「歴史」「文学史」とは何か？

第二段：少年時代の「わたし」
「現在」＝つまらない
「過去」＝偉大・立派
＝不変（時間の不可逆性）
☆本当にそうなのか？

第一段：一九六八年の「わたし」
ビートルズ＝「偉大な人たち」
＝「現在」
↓はじめて「歴史」に触れた瞬間
☆第二段からの変化・推移

第三段：「文学史」への違和感
「過去」の小説と「現在」の小説
×断絶・切断
○類似性・共通性・連続性

第四段：新たな「歴史」観
「文学史」≒　不変
↓「過去」と「現在」に縛られない「文学史」を自分を基点に作る

発問例

●二九九ページ

問 **意味段落1から3の体験を時系列に並べると、筆者の「歴史」に対する考え方のどのような変化が分かるか。**

答 「学校で受けた歴史教育」をとおして「おもしろそうなものは、いつも過去にある」と考えていた「わたし」だったが（意味段落2）、「ビートルズの新曲」がラジオで放送される「歴史的瞬間」に立ち会ったことで、「歴史」とは自分自身が参加し作られるものであるという、それまでの「歴史」のとらえ方を揺さぶる経験を持つ（意味段落1）。さらに「半世紀以上」の読書体験をとおして、「過去」の小説が「文学史」に書いてあるような「評判」とは「えらく違う」ことに気づき、自分で「文学史」を書いてみようと考えるにいたる（意味段落3）。

補 本教材の構成を考えるうえで、意味段落1と意味段落2の時系列が逆になっている点に注意を払いたい。意味段落1での「感動」が意味段落3での自分で「文学史」を書くという発想につながっていく。全体のまとめとして発問することがのぞましい。

●三〇〇ページ

問 **◉「感動」（14行目）とは、どのような感動か。**

答 「歴史的瞬間」に立ち会えたことによる感動。補この内実を後の部分で読み解いていく。それまで筆者は、「歴史」は、遠い過去の死んでしまったできごとで、生きている自分とは関係がないと思っていたが、自分が参加しながら作られていくものだと気がついた。ビートルズの新曲そのものだけでなく、そのことに感動している。

●三〇一ページ

問 **◉自分のことを「すごく単純」（3行目）というのは、なぜか。**

答 学校で受けた教育について、自分で考えることなく、そのまま鵜呑みにしていたから。

問 **「学校で受けた歴史教育」（15行目）を通して、「私」は「歴史」に対してどう考えるようになったか。**

答 偉大なもの、立派なもの、おもしそうものはいつも過去にあり、新しいものはつまらないものに決まっていると考えるようになった。

補 「幼い」頃の筆者の「歴史」認識は、歴史とは遠い過去の出来事であって、生きている「現在」の自分がけっして触れられない、関係がないというものだった。

●三〇二ページ

問 **◉父母や祖父母のたとえから、筆者は距離感と立派さの関係をどのように捉えていることが分かるか。**

答 人々にとって距離が遠く、想像が及ばないものほど偉大に感じられ、敬われると捉えている。

●三〇五ページ

問 **◉「確かに、その人たちの言うとおりだったのです」（6行目）から、筆者のどのような思いが読み取れるか。**

答 文学が変わっていないという筆者のような考え方は文学史にはなかった。「確かに」そうだが、それでいいのだろうか?という疑問も持っている。

問 **◉「説得してみる」（11行目）「眠っている」「遊びにくる」（12行目）などの表現から、筆者が「過去」の小説をどのように捉えていることが分かるか。**

答 いずれも人間に対して使う表現であるため、「過去」の小説を生きているものとしてとらえている。

問 **「鑑賞するために壁に掛けられた絵」（15行目）とは、「過去」の小説のどのような状態を言うのか。**

答「鑑賞」とは、芸術作品に接してその表現するところをつかみとり、そのよさを味わうことを意味する。「壁に掛けられた絵」とは、「文学史」に記された「評判」にしたがって選別された「芸術作品」が陳列され、その「よさ」に関しても定められている状態を言う。

補「歴史」は現在の自分も参加しながら作られていくものだという筆者の認識に触れることができる。半ば固定化された「評判」から自覚的に距離をとり、自分自身を基点にした「文学史」を作り出す活動につなげていきたい。

●三〇六ページ

問**「オモチャみたいなもの」（1行目）という表現から、筆者が「文学史」をどうあるべきと考えていることが分かるか。**

答既存の「評判」に縛られることなく自由自在に組み合わせて作り上げることができる枠組み。

補本教材のタイトルの「大人にはわからない」の「大人」とは、既存の「文学史」を疑うという発想を持ちにくい「人たち」を指し、本文中の「なに、子どもみたいなこと言ってるんだい。『文学史』を読んでみなよ。そんなこと、どこにも書いていないぜ。」（三〇五ページ）と「わたし」をたしなめる「人たち」を言う。

問**◉「いや」（2行目）という否定から、どのような状況や筆者の考えが読み取れるか。**

答「歴史」をオモチャのように扱う筆者の考えが、決して一般的ではない状況がわかる。そうであるからこそ、実行する必要があると筆者は強く思っている。

語句の研究

●三〇〇ページ

3偉大な人たち　ビートルズを指す。形式段落2以降で、「偉大なもの、立派なもの、おもしろいもの」は「いつも過去にある」と考えていたと語られるそれ以前の「わたし」の変化として位置づけられる。

●三〇一ページ

1立ち会った　「立ち会う」とは物事の成り行きや結果を見守るためにその場にいることを意味する。その意味で、いつも過去にあるはずの「歴史」に「現在」の「わたし」が触れ得た、その実感に「わたし」は「感動」を覚えたということになる。

キー・ポイント　「歴史」　過去の人間生活に起こった事象の変遷・発展の経過を、ある観点から秩序づけた記述を指す。「歴史」とはありのままの事実ではなく、あくまでも「歴史」を作る特定の観点・地点を基点とする枠組みであるという点に注意したい。

3単純な少年　従来の考え方やとらえ方が一面的で浅かったと語ることで、「今」の「わたし」がそうではないことが示唆されている。

●三〇二ページ

キー・ポイント　「現在」　「現在」とは、過去と未来の間、過去から未来へと移り行く今、あるいは、近い過去や未来を含む今を表す概念である。「現在」が近い「未来」と近い「過去」とをあわせ持つと考えるとすれば、「現在」の自分自身も当然「歴史」の一部として参加しているということになる。

3「現代」　①現在の世。今の世。当世。②歴史の時代区分の一つ。日本では第二次世界大戦終結後の時代。広義には明治維新以後をさすこともある。東洋史では辛亥革命以後の時代。西洋史では第一次世界大戦終結後の時代。「歴史」「過去」に対するものとして、「　」を付して用いている。

●三〇四ページ

5僕が聞いてきた評判　「評判」とは批評してその是非を判定することを言う。「過去」の小説はすでに「判定」されたものであり、その「評判」は「文学史」のなかで定められている。古今東西の小説を読むなかで、「わたし」はその「評判」に違和感を覚えるようになる。

キー・ポイント　「文学史」　文学の発展の歴史。また、それを研究する学問やそれを記述したもの。ここまでの「歴史」や「過去」に関する筆者独自のとらえ方を「文学史」にも敷衍したい。「歴史」が「現在」の「私」自身が参加し形成され得るものだとすれば、「文学史」もそれと同様に、「過去」の作品を「現在」の「私」の視点から評価し直すことが可能となる。

7敬愛　うやまって大切にすること。尊敬し、親しみの気持をもつこと。

●三〇五ページ

10陳列されているガラス棚　「過去」の小説が「文学史」のなかで、まるで博物館のガラスの展示ケース内に大切に並べられるかのように扱われているということ。

15鑑賞　芸術作品などを見たり聞いたり読んだりして、それが表現しようとするところをつかみとり、そのよさを味わうこと。

注意する語句

（＊で用例を示した）

加速度的…程度がぐんぐん増すさま。
＊加速度的に物価が高騰している。

さびれる…盛んだったものの活気が無くなって衰える。ひっそりして寂しくなる。
＊さびれた商店街を通る。

老いさらばえる…年を取って醜くなる。老衰する。老いさらぼう。
＊老いさらばえて見る影もない。

不可逆的…取り返しがつかないさま。再び元の状態には戻れないさま。
＊歴史というのは、不可逆的なものだ。

えらく…程度がはなはだしいさま。とんでもなく。
＊君もえらく立派になったものだ。

鑑賞

日本の近代文学は一九六〇年代以降に「文学史」として一定の見取り図の下にまとめられていく。もちろん本間久雄をはじめとする戦前からの研究の蓄積があったわけだが、昭和三十八（一九六三）年に筑摩書房から刊行された三冊の文学史（中村光夫『明治文学史』、臼井吉見『大正文学史』、平野謙『昭和文学史』）は、日本近代文学史を象徴するものと言えよう。そこであらためてまとめられた「文学史」は、教材内で筆者が言う「僕が聞いてきた評判」の一部にほかならない。しかし、実際に多くの小説を読んでみると、筆者の眼にはその「評判」とは「えらく違ったもの」に映ったという。なぜだろうか。

「文学」に関する「歴史」、「文学史」とは、「過去」に発表された偉大な作品をありのままに列記したものではない。イタリアの歴史学者ベネデット・クローチェは『思考としての歴史と行動としての歴史』（一九三八）で次のように述べている。

あらゆる歴史的判断の根底に存在する実践的欲求は、あらゆる歴史に「現代史」としての性格を与える。というのも、そこに含まれている諸事実がたとえ年代的にどれほど古く見えようとも、それはつねに現在の欲求と状況と似関わっている歴史なのであり、それらの諸事実がその鼓動を伝えるのは現在の状況のなかにおいてであるからである。

クローチェの指摘は、一九世紀末までの〈事実〉を集めてきて実証主義に基づいて精査すれば自然と歴史が出来上がるといった従来の楽観的な歴史観を大きく揺るがすものだった。E・H・カーは、「もともと、歴史というものは現在の眼を通して、現在の問題に照らして過去を見るところに成り立つ」とし、「過去は、現在の光に照らして初めて私たちに理解出来るものでありますし、過去の光に照らして初めて私たちは現在をよく理解することが出来るものであります」と、クローチェの見解を発展させた歴史観を提示した。

つまり、「歴史」も「文学史」もけっして「鑑賞のために壁に掛けられた絵」ではなく、それを作る「現在」の状況、作り手や社会の関心の所在や価値観、解釈によって事後的に再構成された「現代史」としての性質を必然的に有しているということになる。

筆者は本教材の出典「大人にはわからない日本文学史」（岩波書店　平成二十一）の「七日目　文学史の『晩年』から次の千年の文学へ」のなかで、エドワード・サイードの言葉をひいて次のように述べている。

おそらく、その社会全体が「始まり」の意識の中にあるときは、「始まり」にふさわしい物語が求められるのです。そして、社会全体が、成長し、強大になり、壮年の状態になったときにもまた、それにふさわしい物語が求められるはずです。

以上のような「歴史」の認識を踏まえれば、「過去」の「小説たちが、僕が聞いてきた『評判』とは、えらく違っ」ているという筆者の言葉をイメージすることができるのではないだろうか。

また、筆者はかつての自分の「歴史」観を形成した土台に「学校で受けた歴史教育」があったと述べている。この点についても触れておきたい。喜安朗・成田龍一・岩崎稔は「立ちすくむ歴史

―E・H・カー『歴史とは何か』から50年」（せりか書房　平成二十四）の「第三部」で、平成七（一九九五）年以前の「歴史」の教科書は、学習指導要領に基づいて、決められたページ数のなかで、受験に役立つ事件と年代と人名を並べただけの似たり寄ったりのものであり、教科書に掲載された出来事はすべて「国民的必須事項」として無条件に信じられてきたと述べている。それが平成七（一九九五）年の「あたらしい歴史教科書」の登場を受けて、「歴史」というのは〈事実〉そのものではなく「物語」としての一面を有しているという認識をあらためて突き付けられたと論じている。

「歴史」や「文学史」が、それらをつむぐ基点となる「現在」に応じて変化が生じる流動的な枠組みであるという認識は、「陳列されたガラスの棚」としての「歴史」「文学史」のとらえ方を転換させる力を持つだろう。何より、「歴史」を作る工程こそ「現在」を映し出す鏡のような役割を果たすのであり、そこに浮かび上がる「現在」には、筆者や本教材を読む生徒一人一人も当事者として含みこまれる。以上のような「歴史」観を踏まえながら、生徒個々人が「自分の文学史」を作る活動へと展開していきたい。

参考

・「文字禍」　中島敦　（「文字禍・牛人」〈角川文庫　令二〉収録）

或日若い歴史家（或いは宮廷の記録係）のイシュデイ・ナブが訪ねて来て老博士に言った。歴史とは何ぞや？　と。老博士が呆れた顔をしているのを見て、若い歴史家は説明を加えた。先頃のバビロン王シャマシュ・シュム・ウキンの最期について色々な説がある。自ら火に投じたことだけは確かだが、最後の一月程の間、絶望の余り、言語に絶した淫蕩の生活を送ったというものもあれば、毎日ひたすら潔斎してシャマシュ神に祈り続けたというものもある。第一の妃唯一人と共に火に入ったという説もあれば、数百の婢妾を薪の火に投じてから自分も火に入ったという説もある。何しろ文字通り煙になったことて、どれが正しいのか一向見当がつかない。近々、大王は其等の中の一つを選んで、自分にそれを記録するよう命じ給うであろう。これはほんの一例だが、歴史とは之でいいのであろうか。

賢明な老博士が賢明な沈黙を守っているのを見て、若い歴史家は、次の様な形に問を変えた。歴史とは、昔、在った事柄をいうのであろうか？　それとも、粘土板の文字をいうのであろうか？

獅子狩と、獅子狩の浮彫とを混同しているような所が此の問の中にある。博士はそれを感じたが、はっきり口で言えないので、次の様に答えた。歴史とは、昔在った事柄で、且つ粘土板に誌されたものである。この二つは同じことではないか。

書洩らしは？　と歴史家が聞く。

書洩らし？　冗談ではない、書かれなかった事は、無かった事じゃ。芽の出ぬ種子は、結局初めから無かったのじゃわい。歴史とはな、この粘土板のことじゃ。

若い歴史家は情なさそうな顔をして、指し示された瓦を見た。それは此の国最大の歴史家ナブ・シャリム・シュヌ誌す所のサルゴン王ハルディア征討行の一枚である。話しながら博士の吐き棄てた柘榴の種子が其の表面に汚らしくくっついている。

ボルシッパなる明智の神ナブウの召使い給う文字の精霊共の恐しい力を、イシュデイ・ナブよ、君はまだ知らぬと見えるな。文字の精共が、一度或る事柄を捉えて、之を己の姿で現すとなると、その事柄は最早、不滅の生命を得るのじゃ。反対に、文字の精の力ある手に触れなかったものは、如何なるものも、その存在を失わねばならぬ。太古以来のアヌ・エンリルの書に書上げられていない星は、何故に存在せぬか？　それは、彼等がアヌ・エンリルの書に文字として載せられなかったからじゃ。大マルズック星（木星）が天界の牧羊者（オリオン）の境を犯せば神々の怒が降るのも、月輪の上部に蝕が現れればフモオル人が禍を蒙るのも、皆、古書に文字として誌されてあればこそじゃ。古代スメリヤ人が馬という獣を知らなんだのも、彼等の間に馬という字が無かったからじゃ。此の文字の精霊の力程恐ろしいものは無い。君やわしらが、文字を使って書きものをしとるなどと思ったら大間違い。わしらこそ彼等文字の精霊にこき使われる下僕じゃ。しかし、又、彼等精霊の齎す害も随分ひどい。わしは今それに就いて研究中だが、君が今、歴史を誌した文字に疑を感じるようになったのも、つまりは、君が文字に親しみ過ぎて、其の霊の毒気に中

ったためであろう。

　若い歴史家は妙な顔をして帰って行った。老博士は尚暫く、文字の霊の害毒があの有為な青年をも害おうとしていることを悲しんだ。文字に親しみ過ぎて却って文字に疑を抱くことは、決して矛盾ではない。先日博士は生来の健啖に任せて羊の炙肉を殆ど一頭分も平らげたが、その後当分、生きた羊の顔を見るのも厭になったことがある。

　青年歴史家が帰ってから暫くして、ふと、ナブ・アヘ・エリバは、薄くなった縮れっ毛の頭を抑えて考え込んだ。今日は、どうやら、わしは、あの青年に向って、文字の霊の威力を賛美しはせなんだか？　いまいましいことだ、と彼は舌打をした。わし迄が文字の霊にたぶらかされおるわ。

深い学びのために
学習のポイントの解答例

1　筆者が学校で学んだと述べている「歴史」についての二つの考え方とはどのようなものか、整理してみよう。

【答】
①過去には偉大なものや面白いものがあるが、現在に近づくほど、それらはどんどん少なくなってくる。
②古い歴史は赤ちゃんのような新鮮さがあるが、現在に近づくにつれて、老人のように衰えてくる。

▼ポイント▲　①は「歴史教育のせいだったのです。」以下の三〇二・1～9をまとめる。②は「もう一つ」とあるので、三〇三・8～12をまとめる。

2　1の二つの考え方の共通点は何か、考えてみよう。

【答】　時間は不可逆的なものであり、「歴史」は、過去から現在へ、一方向的に進んでいるため、現在のわれわれと過去には距離がある。

▼ポイント▲　「学習のポイント」1を踏まえて、三〇三・15～16を自分の言葉で置き換える。

3　筆者にとって、「歴史」とはどのようなものか、以下の点について、整理してみよう。

(1)　「現在」と「歴史」の関係をどのように考えているか。
(2)　「過去」の小説とどのような関係を結びたいと考えているか。

【答】
(1)自分が生きている「現在」が、「歴史」を形成していくと考えている。
(2)過去の作品と自分が友達のようにかかわることで、これまでに他人が行った評価や、「歴史」という序列づけとは異なる意味づけを行いたいと考えている。

▼ポイント▲　「学習のポイント」1・2を踏まえ、それに対する筆者の考えをまとめて、全体の論理構造を復習する。(1)については、三〇一・2に「歴史」は自分がかかわるものであること、それにより「ヘンテコなものを作り出せる」（三〇六・1）という創造性への言及がある。(2)については、「よく知っている友達」（三〇四・12）のような関係として、過去の「評判」にとらわれずに（三〇五・10）、現在に生かす意志（三〇五・10～14）が述べられている。

言葉と表現の解答例

1　次の言葉の意味・用法を辞書で調べてみよう。
(1)うるさい（二二九・3）
(2)さびれる（三〇二・6）

⑶ **老いさらばえる**（三〇三・11）

【答】

⑴ ある物事に精通していて、細かいところまで気になる。
⑵ 活気がなくなって寂しくなる。
⑶ 歳をとってみすぼらしくなる。

2　次の言葉の意味・用法を辞書で調べ、それを使って、時間の感じ方に関わる短文を作ってみよう。

⑴ **加速度的**（三〇二・3）
⑵ **不可逆的**（三〇三・15）

【答】

⑴ 変化の度合いが急激に増していくさま。
例：一年の長さの感じ方は、年齢とともに、加速度的に短くなると言われる。
⑵ 再び元の状態には戻らないさま。
例：歴史は不可逆的とする考え方と繰り返すとする考え方がある。

（尾形　大）